
あゝ苦勞

篠原 ひなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ああ苦勞

【Nコード】

N4291F

【作者名】

篠原 ひなた

【あらすじ】

久しぶりに帰省した娘と駅で感動的に別れた主婦は、その娘の【置き土産】に苦悩することになる。はたして、その置き土産とは・・・？

娘は笑っていた。

一点のくもりもないにこやかさで、笑っていた。

「はい、お母さん」

差し出された小ぶりの紙袋を受け取りながらなんとなく聞き逃していた言葉を思い返してみる。

「これ、お母さんが言ってた請求書」

領収書の聞き間違いだと思っていた。

何しろ、3ヶ月ぶりに帰省した娘がまた一人暮らしに戻ろうというのだ。

電車の発車時刻まであと20分を切っている、そんなドタバタした最中に、娘のささいな”言い間違い”に気をとめている暇などなかった。

忘れ物がないか（何しろ切符を忘れて帰ってきたこともある天然娘だ）確認して、あわただしく家を出る。車で駅に送りつけたのは発車時刻の5分前。

「ままりくん、ありがとう〜」

そう叫びながら娘は去っていった。

山ほどの本が詰まった袋を2つも（読みもしないのに！）持つて帰ってきた娘は、案の定手付かずのその袋を背負って行くことになっていたが、それをまったく苦にしていなかったかのようなさわやかな笑顔を残して。

そういえば、と私は思い出す。

出発前ににこやかに写真まで撮った。

あの瞬間のさびしさはどこへ行ってしまったのだろうか。

あらぬところを漂っていた視線を、机上に戻す。

「・・・・・・・・」

ため息すら、こぼれなかった。

そこにあつたのは、本当に請求書だった。

電気代、ガス代、インターネット代金、電話代、水道代など・・・
5月から7月まで3ヶ月分がそろっている・・・それも、すべて未
払いで。

封書がきられていないものも2通あることに気づいて、私はとう
とうため息をついた。そのまま手を伸ばして折りたたみ式の携帯を
開く。とにかく事情を聞いてみなければならぬだろうと思ったか
らだ。リダイヤルで電話をかけかけて、ハタと気づく。

今、娘は電車の中だ。

速やかにCメールに切り替えて、なれない手で文字を打ち込むの
に数分かった。

『何で請求書ばかりあるの。何で払ってないの』

とにかくメールが娘の携帯に届いたことを確認して、私は携帯を
折りたたむ。

堂々と視界に広がってやまない請求書の山に、1ヶ月ほど前のこ
とを思い出す。

「ままりーん、どうしよう」

大学に合格して一人暮らしをはじめて2ヶ月目の娘は、いつものように半泣きで電話をよこした。この間は小麦粉を床にぶちまけたがどうしようという相談内容だったことを思い出して、げんなりしながら続きを促す。今回は、米に白くてによるとうごめく虫が大量にわいたことにパニックを起こしたようだった。とにかく根気強く話を聞いて対処法を教え、やれやれと思いつながら電話を切るタイミングをうかがっていたそのときだった。あらぬ言葉が聞こえたのは。

「夏でよかった。やっぱり冬だと水風呂はきついもんね」
「どういうこと？」

耳を疑いながら、私は尋ねた。食べること読むことの次に長風呂が好きな娘が、水風呂？

「なんかね、ガス止められたみたい」
「はあ？」

あつちへこつちへ飛ぶ脈絡のない話を総合するに、どうやら娘はガス代を払い忘れていたようだった。

「だって。夜8時まで学校があるんだよ。銀行も郵便局も行けないし」
「ガス代くらい払え。今すぐ払え！」

思わず電話口に向かって叫んだ私の気持ちを、分かっていただけだろうか。

何しろ娘の部屋から徒歩5分圏内に、銀行も郵便局もコンビニもあるのだ。

いくら我が娘のすることはいえ、いや、我が娘がすることだから

からこそ、こつも間が抜けた理由でガスを止められるなどという珍事を許容するいわれはなかった。

「はあ〜い」

返事だけは明るく、娘は通話を切った。

一ヶ月前の顛末を思い返して、私は着信のない携帯に向かったため息をつく。

あのときに、聞いておくべきだった。

他に未払いの請求はきていないのか、と。

とにかく、とにかくできるものはどうにかしなければ。

そう思いながら私は目の前の請求書に目を通す。

ガス代2021円、徴収期限5月28日。手遅れだ。

ガス代2321円、徴収期限6月28日。手遅れだ。

ガス代2210円、徴収期限7月28日。これも手遅れ。

電気代、電話代、水道代、とどうにもしようがない請求書の山にげんなりしながら、インターネット代の徴収期限を見つめる。

321円。徴収期限、昨日。

これだけでも、どうにかならないだろうか。

とりあえずいつもの鞆に入れた瞬間だった。

ようやく携帯が間の抜けた着信音を響かせたのは。

ひったくるようにつかんで、メールを開く。

開いた瞬間に脱力した。

『げ、そうだったあ〜?』

「ご丁寧に、首をかしげる猫の絵文字がついている。

私は、携帯を壁に投げつけてやりたい自分をなんとかおさえることで精一杯だった。

「そうだったあ〜？」「じゃないだろう、そうだったあ〜？ じゃ。他にもっと書くべきことがあるのではないか、と思いながら私はもう一度メールを送りつけた。

「そうだった、じゃないでしょう！ 何で払わなかったの！」

時計を見れば午後2時。

そういえば今日は銀行に用事があったのだった、ととりあえず立ち上がる。

はつきり言えば、不貞寝したい気分だった。

誰に似たんだうちの娘。

それからのことは、はつきり言って思い出したくない。

件のインターネット代は、「申し訳ありませんが、期日がすぎたものはお取り扱いたしかねます」と、アルバイトの女性にものごく申し訳なさそうな声音で丁寧に支払いを拒否された。

ガス代と電気代にいたっては、問い合わせの電話をかけた時点で「お母様でございますか。申し訳ありませんがご本人にしかお答えできないんです」とやはり丁寧に謝罪され、むしろこちらの立つ瀬がなかった。

「悪い子じゃないんです。ただ単に、払い方を教えてなかっただけなんです。悪気はなかったんです」

思わずそう言って平謝りして電話を切ったあとで、沸々と湧き出してきたこのやるせなさをいったいどこにぶつければいいのかというのだろう。

娘は未成年。監督責任はまだ私と夫にある。

だが、18のそれなりに分別もあるはずの娘がこんな珍事を引き起こすなんて予想できるはずがあつてなるものか、と言いたい。

『私が持つて帰つてきなさいと言つたのは、領収書であつて、請求書じゃないのよ』

改めてメールを送りながら、私はひっそりとため息をこぼした。

はつきり言つて、本社まで行かなければ支払えないこの請求書の山はここにあつてもどうしようもない。

かと言つて、あのあほ娘に送りつけたところで、支払いが一人でできるとも思えない。

こうなつたら、あの娘の近くで同じく一人暮らしをしている長女に後を任せるしかない。

・・・あの長女に任せていいものか、ひどく心配だが、この際そこには目をつぶることにして、私は携帯の短縮ボタンを押した。

ああ、苦労。

(後書き)

はじめまして。もしくは、お久しぶりです。
水音灯と申します。

あなたがそこに居てくださることが嬉しいです。
この物語を読んでくださってありがとうございます。

当人にとってはシリアス、でも傍から見るとコメディってこの世の中にはあふれているような気がします。今回は、そんな事件の一つをフューチャーしてみました。

ご感想・ご批評、誤字・脱字のご指摘などいただけると嬉しいです。(明日への活力になります)
どうぞよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4291f/>

ああ苦勞

2010年10月14日23時05分発行